



博物館だより

Nagano City Museum

第104号

大集合！5,000体の土人形 ～夏目コレクションの軌跡～



写真1 各地の土人形

はじめに

博物館では1月27日から3月25日まで、収蔵している土人形（土鈴を含む）を約5,000体展示します。この中には地元長野県中野の土雛はもとより、全国各地の土人形が網羅されています。そんな数多くの土人形、実は一人のコレクターが40年近くかけて集

めたものです。いったいどんな人が、どのような思いでこれほどの数を集めたのでしょうか？

ここではこのコレクションをつくった夏目隆一さん（1931 - 2008）を紹介しながら、コレクションの軌跡をたどっていきたいと思います。

夏目隆一さんと郷土玩具の出会い

5,000体の土人形を集めた夏目隆一さんは、長野市早苗町で外科医院を開業していたお医者さんでした（写真2）。昭和6年に長野市で生まれた夏目さんは、昭和20年代後半、医者を目指して千葉大学の医学部に進みました。郷土玩具との初めての出会いはこの頃にまでさかのぼります。

それは千葉市内の、ある小さな駄菓子屋

を訪れたときでした。その時のことを夏目さんは後に「私と郷土玩具」と題して北信ローカルという地元の新聞紙に記しています。「私は一人で古本屋めぐりの目的でうら寂しい千葉市内を散策していた。その時、うす暗いひなびた駄菓子屋兼オモチャ屋の店頭に、実にユーモラスな表情をした張子のトラやウシがそよ風にゆれながら静かに首を振っている情景に遭遇し、私はふ



写真2 夏目さんとコレクションの一部



写真3 柏の張子玩具

と足をとめてしまった。私はこの素朴な玩具をじっと凝視しているうちに、妙なセンチメンタルな気分になり「これこそ日本人の心の古里だ！！」と感動し、早速二、三品を買い求めた。(中略) せっかく江戸時代から連綿と受け継がれてきた、庶民の貴重な文化財であるこれらの郷土玩具が時代と共に次々と世の中から姿を消していくのは世界に冠たる日本の伝統文化の破滅だと、私は切齒扼腕、慙愧の思いで、「今のうちに私が集めておかなければ！」とある種の使命感が心の中に燃え上がり、私は“物の怪”にとりつかれたように夢中で収集に専念した。」郷土玩具との衝撃的な出会いが、夏目さんを強い使命感をもった収集へ向かわせたことがわかります。

夏目さんの心を揺り動かした郷土玩具は千葉県柏市で作られていた柏張子でした。夏目さんのコレクションは、この張子玩具から始まったのです(写真3)。



写真4 中野土雛(武内宿祢)

古物商から入手した中野の土雛。底に記された墨書から、旧の持ち主が二歳の時に贈られた物であることがわかる。かつて、土人形は子供の誕生時や男女の節句の際の贈り物にも用いられていた。

コレクションの形成

夏目さんは手に入れた土人形や郷土玩具の記録をつけていました。土人形なら産地、人形の種類や入手年月日、金額、入手先といった具合になります。これらは、大学ノートに日本の土人形・中野土雛・松本押絵雛といったタイトルが付けられ、種類ごとにまとめられていました。またノートの間には、各産地の土人形製作者や郷土玩具愛好家から受け取った手紙が挟まれ、保管されていました。これらの記録類から、コレクション形成の過程がわかります。

1 初期の収集 ～土産品や骨董品として～

先に紹介した北信ローカルの記事には、柏の張子玩具との衝撃的な出会いの後「それからというものは、私は郷土玩具の天衣無縫な美に魅せられて、学生仲間と旅行したり、(中略) 医学会などで全国に出張するたびに、各地の古物商や玩具製作者を訪ねて、なけなしの軽い財布を叩いて土人形や張子玩具を買い漁った。」と、初めの頃の収集の様子について記されています。その後、昭和40年に長野へ戻って外科医を開業すると、旅行で病院を空けることが難しくなり、もっぱら地元の古物商から土人形を購入するようになりました(写真4)。

残された土人形の整理ノートに記された購入年月日を見ると、開業後から昭和50年



代までは、長野、上田、飯山の古物商から、古い中野の土雛を中心に買い集めていたようです。

ちょうどこの頃、『東洋薬事報』という医薬の業界誌に「私のコレクション 郷土玩具」と題して夏目さんが寄稿をしています。そこでも「この頃ではもっぱら地元信州の隠れた郷土玩具を掘り起こしているが、とりわけ古い伝統を持つ中野土雛、松本押絵雛など新旧作品を含めて蒐集し、その変遷ぶりを追及している。」と記しています。

2 土人形製作者との交流

「時代と共に次々と世の中から姿を消してゆく」郷土玩具を目にし、「今のうちに私が集めておかねば！」と決意した夏目さんにとって、古い土人形の蒐集に加え、現在残っている土人形をはじめとする郷土玩具の蒐集も大事でした。しかし、旅行などで現地に行って郷土玩具を購入するということが難しかったため、各地の郷土玩具製作者に

直接連絡を取って品物を購入するようになりました。

現在のようにインターネット等による通信販売が十分に整備されていなかった時代、全く面識のない製作者への連絡手段はもっぱら手紙でした。土人形の整理ノートの間には土人形製作者からの多くの手紙や葉書が挟まれています。葉書は返信用葉書が多く、必ず製作者から返事がもらえるように、往復葉書を利用して玩具の注文や問い合わせをしていたことがわかります。

この郷土玩具製作者とのやり取りについては、夏目さんのコレクションを取材した週刊長野という地方の新聞紙で「(郷土玩具製作者は)10円のお釣りを60円かけて送ってよこすような人ばかりですね。気に入ってもらうまで何度も足を運んだり手紙を書いたりしてネ、やっと頼んでも、何年も待たされたりとか。まア、気が長くなくちゃ郷土玩具は集められないでしょう。」と話しています。



写真5 蚕神



写真5 古い中野立ヶ花土人形(蚕神)

復活させた中野立ヶ花土人形(蚕神)(左写真)。西原さんは夏目さんの蚕神を借りて型を取り、かつてあった立ヶ花の蚕神(右写真)を復活させた。

このようなやり取りのなかで特に親しくなったのが、地元中野土人形の作者奈良久雄氏や西原邦夫氏、三河大浜土人形の作者禰宜田章氏や古博多土人形の作者中ノ子勝美氏だったようで、作品の土人形とともに、夏目さんが製作者宅を訪れた時の写真や、製作者を自宅へ招いた時の写真などが残されています（写真5）。

3 コレクター同士の交流

整理ノートに残されていた手紙には夏目さんと同じように郷土玩具を集める蒐集家からのものもありました。その内容は郷土玩具に関する書籍販売のやり取りや、各自のコレクションの交換や寄贈、購入、郷土玩具の研究会入会の勧誘などです。

手紙の差出を見ると、伏見人形を中心とした蒐集家・郷土玩具研究者として有名だった奥村寛純氏や佐土原土人形の研究を行った宮崎県の民俗研究者青山幹雄氏、静岡を活動の本拠地とする日本雪だるまの会の創設者である佐野つとむ氏らの名前が見られ



写真6 マトイ持ち (63—1)
伏見人形のマトイ持ち。奥村氏より贈呈された。

ます。また地元では中野の土雛の蒐集家として有名な小古井嘉幸氏との交流が、後で紹介するような中野市の土人形を活用した観光振興への協力へと繋がってゆきました。

このようなコレクター間のネットワークも蒐集の原動力だったようです（写真6）。

4 コレクションを見せたい

このようにしてコツコツと集めた郷土玩具は膨大な数にのぼり、先に紹介した北信



写真7 展覧会パンフ

ローカルのなかでは「今やその総数は2万点以上になってしまった」（平成2年の記事）とあります。そして同じ記事の中に「私は莫大な所蔵玩具をただ漫然と後生大事に倉庫の中に眠らせておくのも宝の持ち腐れで、全く無益なことであり、出来ることなら何かの形で天下万民のために役立てたいと願っていた。」とあるように、この前後から夏目さんは自身のコレクションを、地元の博物館や商工会が開く展覧会に出品するようになります。

特に、中野土人形の人気を背景に、平成元年日本土人形資料館をオープンさせた中野市へは、コレクションを出品するだけでなく展示会のテーマ設定や資料解説の執筆にも関わるなど、コレクションを通して市の観光振興に協力するようになっていきました。しかも、毎回異なるテーマで展示会を行うためにさらに郷土玩具が集められていきました（写真7）。

コレクションの寄贈と整理

平成2年の段階で2万点以上だった郷土玩具は、夏目さんが亡くなる平成20年まで増え続けました。その後ご遺族の申し出により平成25年に当館に寄贈されることになりましたが、すでに閉院した病院の手術室

や病室にうず高く積まれた郷土玩具の入った段ボール箱を資料として受け入れるには、それ相応の時間と人手が必要でした。

そこで、博物館友の会にある民俗同好会「ほのぼの」のメンバーに声をかけ、その年から月に数回の割合で、コレクションの最も多くを占める土人形を中心に整理を進めてきました。それと同時に、ある程度の数の整理が終わるごとに、資料公開を兼ねた展示会を民俗同好会のメンバーと一緒に行ってきました（写真8）。

コレクションの内容

平成25年度から土鈴を含む土人形の整理を続けてきましたが、5年の歳月をかけてこのたび完了することが出来ました。その総数は5046点、産地はほぼ全国各地を網羅していますが、特に多いのが、長野県（838点）、愛知県（368点）、福岡県（364点）です。長野県が断トツに多いのは、夏目さん自身が「信州の隠れた郷土玩具を掘り起こしている」と言っていることからして、当然のことといえるでしょう。次いで愛知県、福岡県のものが多いのは、三河大浜土人形作者の禰宜田章さん、古博多土人形作者の中ノ子勝美さんとの関係によるところが大きいと思われます。これらに次いで滋賀県、京都府が続きますが、滋賀は小幡土人形、京都は伏見土人形が産地として有名です。特に小幡土人形では干支をテーマとしたものが多く集められていましたが、干支にまつわる郷土玩具を集めることも夏目さんのコレクションのテーマの一つでした。そのため、小幡土人形に限らず各産地の干支にまつわる土人形も集められています（写真9）。



写真8 人形展示風景

民俗同好会ほのぼののメンバーによる整理及び展示準備



写真9 千支の小幡土人形

おわりに

郷土玩具の蒐集はすでに明治時代からみられました。当初は近代化という名のもとに、それまでの生活文化が軽視されがちになっていた社会状況に対し、近代化批判の一つの方法としての意味合いで、一部有識者の間で行われていたのが郷土玩具の蒐集でした。その後次第に郷土玩具の蒐集が大衆化すると、その政治的な役割は失われました。しかし郷土玩具は人々を魅了し続け、現在でも夏目さんのように蒐集を行っている人々がいます。

郷土玩具の魅力について、それ自体が持つ素朴さや愛らしさが人を惹きつけるためとか、大量生産品ではなく入手しづらい点か、却って手に入れた時の満足感や達成感を生むためなど分析をすることはいくらかでも可能でしょう。しかしその動機、原動力はコレクターによってさまざまで、本人にはわからないことかもしれません。

5,000体の土人形を含む2万点以上の郷土玩具を集めた夏目さんは、郷土玩具の何に魅力を感じていたのでしょうか。先に紹介した『東洋薬事報』の「私のコレクション 郷土玩具」の中で夏目さんは「外科医として日夜、血なまぐさい殺伐とした仕事に従事しているせい、自宅でこれら郷土玩具の土の香を味わうたびに、その日の疲労まで一瞬のうちに霧散し、心の安らぎさえもたらしてくれる。」と記しています。常に緊張感を持って臨まなければならない仕事から解放してくれる、癒しの効果が最大の魅力だったのではないのでしょうか。

今回展示する土人形は郷土玩具に癒しを求めた夏目さんが集めたものですが、その魅力は見る人によってさまざまだと思います。皆さんはこれらの土人形にどのような魅力を感じるでしょうか？ぜひ今回の展示で確かめてみてください。

(細井 雄次郎)

資料紹介 豊野川谷日影のドウロクジン

長野市豊野の日影地区では、毎年小正月の時期（1月15日頃）に「ドウロクジン」と呼ばれる人形を作っています。人形は男女一対のもので、作った人形は一斗枥に入れて神棚に飾ります。そして、前年の人形は地区内の道祖神碑に供えます。子どもがいる家では、よい婿や嫁との良縁を願って供えました。

写真の人形は、同地区で作られたドウロクジンです。製作時期はわかりませんが、

長野市と豊野町の合併前に、旧豊野町歴史民俗資料館に寄贈されたものです。合併に伴い、長野市立博物館本館に移管されました。木と紙で作られています。また、家で飾られていた様子を再現するため、一斗枥に入れられています。

近年、ドウロクジンのような人形を作る家は減っていますが、同地区では一軒の家が毎年作っているようです。

（樋口明里）



写真 ドウロクジン

企画展示「これは何？—小正月のツクリモノと暮らし—」にて展示されている様子

博物館だより 第104号

発行日2017年12月28日

長野市立博物館

〒381-2212 長野市小島田町1414
TEL:026(284)9011
<http://www.city.nagano.jp/museum>

戸隠地質化石博物館

〒381-4104 長野市戸隠栢原3400
TEL:026(252)2228

鬼無里ふるさと資料館

〒381-4301 長野市鬼無里1659
TEL:026(256)3270

信州新町美術館・有島生馬記念館・信州新町化石博物館

〒381-2404 長野市信州新町上条88-3
TEL:026(262)3500

ミュゼ蔵

〒381-2405 長野市信州新町37-1
TEL:026(262)2500

正誤表

以下の箇所には誤りがありましたので訂正いたします。関係各位にはご迷惑をおかけし、誠に申し訳ありません。

訂正箇所	誤	正
表紙写真下文章 11 行目	夏目隆一さん(1931-2008)	夏目隆一さん(1931-2010)
4 ページ 3 行目	西原邦夫氏	西原邦男氏
5 ページ 23 行目	平成 20 年まで	平成 22 年まで
7 ページ 4 行目・15 行目	一斗枡	一升枡